

皆さんの中にもペットを飼っている方がいらっしゃると思いますが、今回はそのペットや野生動物等から感染する病気、動物由来感染症のお話しです。

< 動物由来感染症って何？ >

この言葉を目にするのは初めての方もいらっしゃると思いますが、漢字から意味を用意に想像していただけるものと思います。おわかりのとおり「動物感染由来感染症」とは、動物から人間へ移る感染症を表す言葉です。

動物由来感染症の原因となる病原体には、大きいものでは何センチ（ときには何メートル）もある寄生虫から、電子顕微鏡を用いなければ見ることのできないウイルスまで、さまざまな病原体があります。またプリオンと呼ばれる蛋白質までも動物由来感染症の原因となります。

病原体を持つ動物は、イヌやネコのようなペット、ウシやブタなどの家畜、カラスやネズミのような都市部に住む動物、キツネやサルのような野生動物に分類できます。

現われる症状は感染する病原体により様々ですが、以下に日本でみられる(みられた)主な動物由来感染症とその特徴を挙げてみました。

・狂犬病

イヌへのワクチン接種が広く行われたことにより、現在日本では撲滅された病気です。しかし世界では、いまだに毎年 3 万～ 5 万人の命を奪っています。この病気は発症してしまうと、人もイヌも 100% 死亡する、恐い病気です。主に狂犬病ウイルスを持ったイヌに噛まれることにより感染します。

・オウム病

最近、テレビなどで騒がれている病気なのでご存知の方も多いと思いますが、オウムに限らず、鳥から感染する病気です。人へは鳥の羽毛や撒き散らされた排泄物などを吸い込んで感染します。インフルエンザのような症状を示し、ひどくなると肺炎になります。

・エキノコックス症

北海道で主にみられる病気です。エキノコックスに感染したキタキツネやイヌの糞に混じったエキノコックスの卵が、水や食べ物を介して人の口に入り感染します。腹部の不快感を示し、やがて熱が出たり皮膚の色が黄色くなったりします。

このほかにも、Q 熱、レプトスピラ症、日本脳炎、パストツレラ症などの病気がありますが、いずれも風邪に良く似た症状が出る人が多いのですが、ただの風邪とは区別が必要です。

< 注意することは？ 予防対策は？ >

日常生活で注意をすること

犬の予防注射と登録

飼い主さんには狂犬病予防のための努めが法律で義務づけられてます。ご相談は市町村等の窓口で。

過剰なふれあいは控えましょう

細菌やウイルスなどが動物の口や爪の中にいる場合があるので、口移しで餌を与えたり、スプーンや箸の共用はやめましょう。動物を布団に入れて寝ることも、知らないうちにひっかかれたりするので要注意です。

動物にさわったら、必ず手を洗いましょう

知らないうちにだ液や粘液に触れたり、傷口などにさわってしまうこともあるので、動物にさわったら、必ず手を洗いましょう。

動物の身の回りは清潔にしましょう

飼っている動物はブラッシング、爪切りなど、こまかく手入れをして清潔にしておきましょう。小屋や鳥かごなどはよく掃除をして、清潔を保ちましょう。タオルや敷物、水槽などは細菌が繁殖しやすいので、こまめな洗浄が必要です。

糞尿はすみやかに処理しましょう

鳥やハムスターなどの糞便が乾燥すると空中に漂い、吸いこみやすくなります。糞便に触れたり吸いこんだりしないよう気をつけ、早く処理しましょう。

室内で動物を飼育する時は換気を心がけましょう。

砂場や公園は特に注意が必要です

動物が排泄を行いやすい砂場や公園は注意が必要です。特に子供の砂あそび、ガーデニングの草とりや土いじりをした後は、十分に手を洗いましょう。

エキゾチックアニマル（珍しい輸入野生動物）の飼育は控えめに

感染症予防のためにも、また動物資源保護の観点からも、輸入野生動物の飼育は控えめに。

医療機関を利用しましょう

動物（ペット）も定期検診で病気の早期発見を！

動物由来感染症の病原体に感染しても動物は無症状なことがあるため、知らないうちに飼い主が感染してしまう場合があります。ペットの定期検診を受けるなど健康管理に注意し、病気を早めに見つけましょう。またペットが病気と診断された場合、動物由来感染症であるか否かを獣医師に確認しましょう。

かかりつけの動物病院で相談！

ペットのかかりつけ動物病院を持ち、相談できる関係づくりが大切です。飼い方、病気の予防やワクチン接種などの相談ができると安心です。まず、自分の身近な動物から感染の恐れのある動物由来感染症について、知識を得ることが大切です。

からだに不調を感じたら、早めに受診を！

動物由来感染症に感染しても、かぜやインフルエンザ、皮膚病などに似た症状がでる場合が多く、病気の発見が遅れがちです。特に子供や高齢者は感染しやすいので要注意です。早めに医療機関で受診し、ペットの飼育状態についても医師に説明しましょう。

